［総説・解説］

# コミュニティソーシャルワーカーを描いた テレビドラマにおける職業像の研究

田中　秀和

キーワード：コミュニティソーシャルワーカー，職業像，テレビドラマ，フィクション

# A Study of Occupational Image in the Television Drama Depicting a Community Social Worker

Hidekazu Tanaka

Abstract

I focused TV drama “Silent Poor” in which a social worker who works for a social welfare council is a chief character, and analyzed the professional image of the social worker portrayed in the TV as to how he is and how he works from the standpoint of the specialty of social work. The figure of the drama is a community social worker who works at a community welfare council and it is portrayed how hard he works for the solution for the various problems that happened in the community today. In addition, there were lines of the effect that a chief character was a licensed social worker licensee in the drama. However, the drama had the problem point that the contents of the training course of social workers were not clarified.

Key words：Community Social Worker，Image of Social Worker，TV Drama，Fiction

**要旨**

社会福祉協議会に勤務するコミュニティソーシャルワーカー（CSW）を主人公としたテレビドラマ「サイレント・プア」に焦点をあて、そこで描かれているソーシャルワーカーの職業像をソーシャルワークの専門的見地から分析した。

ドラマ内においては、社会福祉協議会に勤務するコミュニティソーシャルワーカーである主人公が、今日生じている様々な問題に対し、懸命になって解決を目指す姿が描かれていた。また、ドラマ内においては主人公が社会福祉士資格取得者である旨の台詞があった。

しかし、ソーシャルワーカーの養成教育課程が明らかにされていないという課題点もみられた。

## Ⅰ　研究の目的

ソーシャルワーカーの職業像が明確化されることは、一般市民がソーシャルワーカーの支援をより身近に受けやすくする機能をもつ。また、ソーシャルワーカーの認知度が上昇することは、将来、ソーシャルワーカーを目指す子どもたちをより多く確保することにもつながると考えられる。少子・高齢化が進展する今日、より質の高い福祉人材確保のためには、その専門性向上が不可欠な

所属機関：立正大学　社会福祉学部　社会福祉学科

［連絡先］　〒360-0194　埼玉県熊谷市万吉1700
TEL：048-536-6670
E-mail：tanaka.hidekazu@ris.ac.jp

投稿受付日：2014年６月９日
掲載許可日：2014年９月２日

要素となる。ソーシャルワーカーの職業像が明確化されることは、その専門性向上の一助となり、当該職業の社会的地位向上にも寄与するものと考えられる。田中・立花は、高校生のなりたい職業に関する調査の中で、社会福祉士の名前が挙がっておらず、「今後よりそれらの社会的地位の向上、専門性の確立等が求められる」としている[1)]。

また今日のソーシャルワーカーは、他職種との連携や協働がこれまで以上に求められるようになっている。ソーシャルワーカーの職業像を明らかにすることは、ソーシャルワーカー以外の対人援助専門職に従事する者が、その職務内容を理解する一助となる。それは、多職種の連携や協働を促進する機能を生じさせ、結果的に福祉ニーズの掘り起こしや早期発見・対応に役立つことになる。

このように、ソーシャルワーカーの職業像を明らかにすることは意義あることであるといえる。本稿では、ソーシャルワーカーがテレビドラマのなかでどのように描かれているのかを考察し、その現状と課題を明らかにする。

## Ⅱ　ソーシャルワーカーを描いたメディア作品に関する先行研究

これまで述べてきたような問題意識に基づき、ソーシャルワーカーの職業像をソーシャルワークの専門的見地から分析を試みた研究として、まず横山の先行研究を取り上げることができる。

横山は、1992（平成４）年に放送された医療ソーシャルワーカーを主人公とするテレビドラマ「天使のように生きてみたい」に対し、ソーシャルワークの専門的見地から分析を試みている[2)]。そこでは、肯定的に評価される点として、「ソーシャルワーカー」という職種の存在を伝えている点、保険医療制度のもとでの病院経営の実態と事務職員の働きを描いている点、医療ソーシャルワーカー配置に対する理解度に格差が存在する様を描いている点の３点を挙げている。また否定的に評価される点として、ソーシャルワーカーを養成する専門教育のプロセスが正確に伝えられていない点、ソーシャルワーカーと医療職の専門的立場について、大きな誤解を招く発言がある点の２点を抽出している。

一方、田中は2006（平成18）年に放送された看護師を主人公とするテレビドラマ「Ns’あおい」に登場するソーシャルワーカーに焦点を当てて、そこで描かれているソーシャルワーカーの姿を、ソーシャルワークの専門的見地から分析している[3)]。そこでは、肯定的に評価される点として、ソーシャルワーカーという職種が存在していることを公にしている点、ソーシャルワーカーにも、ある程度の医学知識が必要とされていることが明らかにされている点の２点を挙げている。また、否定的に評価される点として、ソーシャルワーカーの養成教育課程が明らかにされていない点、日本のソーシャルワーカーに対して、その専門性が全く確立していないような誤解を招く発言がある点の２点を挙げている。

上記の研究は、ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマを研究対象としたものであるが、ソーシャルワーカーを主人公としたノンフィクション番組を分析した先行研究も存在する。

田中は、2005（平成17）年に放送されたNHKの「あしたをつかめ　平成若者仕事図鑑」について、分析を行っている[4)]。そこでは、肯定的に評価される点として、主人公が医療ソーシャルワーカーを目指した経緯を紹介している点、短時間ではあるが、医療ソーシャルワーカー養成課程の説明を行っている点の２点を挙げている。また、否定的に評価される点として、国立病院に勤務しているソーシャルワーカーのみが取り上げられ、どこまでソーシャルワーカー一般に普遍化できるのかという問題が残る点を挙げている。

ソーシャルワーカーは、これまで述べてきたような映像作品のみではなく、漫画や小説のなかでも描かれている。横山は、ソーシャルワーカーを描いた漫画作品と小説を題材にして、そこに描かれたソーシャルワーカー職業像の研究を行っている[5)]。そこでは、漫画作品に描かれるソーシャルワーカーの特徴として、中学・高校生など将来の進路選択を考える若者が手に取りやすく、短時間で読むことができるため、対人援助職の貢献や魅力を伝えるには相当影響力があることが述べられている。しかし、漫画作品においては簡素化や割愛をせざるを得ない部分が多く、ソーシャルワーカーの扱う問題の性質や働きを的確に描写するには制約と困難があるとしている。また、小説は、読者の年齢層が高くなるが、ソーシャルワーカー像の丁寧な描写が可能なメディアであると述べられている。

横山は別稿において、医療ソーシャルワーカーを扱った各種フィクション作品について、歴史的に整理を行っている[6)]。そこでは、当該作品が漫画として1980年代初頭に登場し、1990年代にはテレビドラマとして描かれ、2000年代には長編小説にも登場するようになった過程が述べられている。

ソーシャルワーカーの職業像に関する研究は、潜在的な福祉ニーズを持った利用者の掘り起こしや将来の福祉人材確保の点から重要であるが、その歴史は比較的浅く、これからもその深化が望まれる研究分野であるといえるであろう。

## Ⅲ　研究対象と方法

研究対象である以下のテレビ番組について録画を行

い、後日それの視聴を行った。視聴の際には、番組内で描かれているソーシャルワーカーの職業像をソーシャルワークの専門的見地から明らかにすることに努めた。

〈研究対象〉

NHK連続ドラマ「サイレント・プア」

〈放送日時：2014（平成26）年4月8日～6月3日
毎週火曜日：22:00～22:48　連続9回〉

コミュニティソーシャルワーク監修：勝部麗子

撮影協力：全国社会福祉協議会等

取材協力：大阪府豊中市、豊中市社会福祉協議会等

あらすじ：東京下町にある社会福祉協議会に勤務するコミュニティソーシャルワーカーである主人公が、地域で生じる様々な問題に立ち向かい、仲間と共にそれを解決していく過程が描かれている。番組のキャッチコピーは、「私は、その手を離さない」。

## Ⅳ　倫理的配慮

本稿にて取り上げるテレビドラマは、ソーシャルワーカーの職業像を明確化させるために制作された訳ではない。しかし、本稿の目的は、テレビドラマを通して描かれたソーシャルワーカーの職業像を明確化することにある。よって、その問題点を指摘する場合においても、対象とする作品のエンターテイメントとしての側面について評価・批評を行っているものではない。そのため、原作者や出演者の意図に必ずしも沿わない可能性があることを、あらかじめ述べておく。

## Ⅴ　研究結果

### 1　肯定的に評価される点

#### 1）　今日の社会問題を取り上げ、その解決を目指して働くソーシャルワーカーの姿が描かれている

ドラマのタイトルである「サイレント・プア」は、声なき貧困と訳すことができる。格差社会の進展や雇用の不安定化、地域社会のつながりの希薄化等により、貧困はますます深刻化している。ここで取り上げられている貧困とは、単なる経済的貧困だけではない。ドラマの中では、ゴミ屋敷、アルコール依存、社会的ひきこもり、ホームレス、若年性認知症、不法滞在する外国人、高次脳機能障害、東日本大震災の被災者支援等、多様なテーマを取り上げている。これらは、「人間関係の貧困」という共通項を持っている。近年、そうしたソーシャルキャピタル（社会関係資本）に関する研究も積極的に進められ、様々な書物が刊行されている[7),8)]。当該作品においては、連続ドラマという特性を活かし、主人公のコミュニティソーシャルワーカーや、地域住民によってサイレント・プア状態を脱出した登場人物が、後に当該地域の中で活躍し、新たに生じた地域における問題の解決を手助けする場面も描かれている。

またドラマ内においては主人公のソーシャルワーカーが、上記の様々な問題に対して解決を目指し、分け隔てなく懸命に努力する姿が描かれている。その過程は、苦難に満ちたものであるが、それもソーシャルワーカーの醍醐味を伝える一助として機能している。

本放送の第1回において、主人公が地域住民に対し、自身の仕事内容を以下のように説明している。

> 「私たちはコミュニティソーシャルワーカーと申しまして、町のなかのSOSを掘り起こし、抱えている問題を住民のみなさんと一緒に解決していく専門職です。」

また、第2回放送から第6回放送においては、その冒頭に主人公のナレーションが入り、コミュニティソーシャルワーカーの仕事内容について、以下のように説明している。

> 「コミュニティソーシャルワーカー──制度の狭間で救われずに苦しむ孤立や貧困、その声にもならないSOSを見つけ出し、地域で支える仕組みを作る仕事です。」

上記は、ソーシャルワーカーが何を職務内容としているのかについて、わかりやすく説明しているものと捉えることができる。また、主人公が多様な問題に正面からぶつかっていくことは、ソーシャルワーカーという職業の多面性を表現しているといえる。

このドラマを視聴することにより、社会福祉協議会やコミュニティソーシャルワーカーの存在を初めて知った視聴者も数多く存在すると推測され、ソーシャルワーカー職業像の明確化に大きな貢献を果たしているといえる。

本作品は連続ドラマであるため、単発ドラマと比較して視聴できる機会が数多く用意されている。また、本作品は放送の翌週深夜にも再放送されており、ソーシャルワーカーの存在がより多くの一般市民に認知される可能性を高めている。

本作品はキャストに深田恭子・桜庭ななみ等の人気俳優を起用している。このことは、ドラマの内容に関心がなくとも、自分の好きな俳優の活躍を鑑賞するためにドラマを視聴するティーンエージャーが、結果的にソーシャルワーカーの存在を知り、将来、社会福祉士養成校に入学する確率を高めることにも繋がる。

ドラマ内においては、コミュニィソーシャルワーカーが、小学校や病院に出向き、教師や病院スタッフと話し

合う場面も描かれている。ソーシャルワーカーの仕事は決して、自身が所属する機関・組織のみで完結するものではない。ソーシャルワーカーが多職種と連携し、共に問題を解決していく姿が描かれたことは、その職業の魅力を伝える機能を果たしているといえる。

**2）社会福祉士国家資格の存在がドラマ内で明らかにされている**

ドラマ内においては、主人公自身が自らを社会福祉士であると発言する場面がある。また、放送内で、登場人物たちの名刺が映しだされる場面があり、そこにも社会福祉士の資格名が記載されている。

また第１回の放送内において、主人公が地域福祉課長に自身の職歴を述べる場面がある。そこでは、以下のように発言している。

> （地域福祉課長からの「長いんですか、現場？」との質問に対し）「社会福祉士になって７年。昨年からは導入されたCSWの職に就いています。」

ドラマ内において、登場人物が社会福祉士という資格名を発言したのは、上記の１回のみであった。

社会福祉士及び介護福祉士法が1987（昭和62）年に制定されてから、四半世紀以上が経過した今日、社会福祉士の任用は十分に進んでいるとは考えられない状況にある。地域包括支援センターや医療機関においては、その活用も進んでいるが、それがすべての社会福祉施設・機関に浸透していないのが現状である。横山は、社会福祉士制度の現状について、「社会福祉専門職の国家資格制度ができて四半世紀を迎えようというのに、社会福祉の一線の行政機関における有資格者の割合がわずか５％にも満たない事実からすると、この資格がまだ社会的に十分機能しているとはいい難い状況であると認めざるを得ない」と述べている[9)]。

しかし、ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマのなかで、その主人公が自身をソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士資格保持者であると発言したことの意義は大きい。上記にも述べたように、本作品はキャストに人気俳優を起用している。その人気俳優がドラマ内で、自身を社会福祉士であると発言したことは大きな影響力をもつと考えられる。

「自分の好きな俳優が出演するテレビドラマであるから」という理由で、ドラマを視聴していたティーンエージャーが、社会福祉士という資格名を聞き、それに関心をもつ可能性は十分に考えられる。それは、これまで述べてきたように、将来の福祉人材確保にもつながりうることであり、意義深いことである。

また、ドラマ内においてはコミュニティソーシャルワーカーの姿が描かれているが、社会福祉士という資格名を主人公が発したことにより、その職域の広さを改めて確認する視聴者も多いであろう。例えば、特別養護老人ホームに入居している利用者の家族は、高齢者施設における社会福祉士の存在は知っていても、それが多様な職域をもつ職業であることを認識する機会は限られている。本作品は、社会福祉協議会に勤務するソーシャルワーカーにも社会福祉士資格取得者が存在することを明らかにしている。このことは、視聴者が社会福祉士の職域が広いことを理解する一助となり、仮に自身や家族が福祉サービスを必要とする機会が訪れた際、福祉サービスの利用をよりスムーズに進めるであろう。

**2　否定的に評価される点**

**1）ソーシャルワーカーの養成教育課程が明らかにされていない**

ドラマ内においては、社会福祉士という資格が存在することは明らかにされているが、その養成課程については一切触れられていない。これまでのソーシャルワーカーの職業像に関する一連の先行研究のなかでも、番組内ではソーシャルワーカーの養成教育課程について正確に伝達する役割を果たすことが期待をされている。

本ドラマにおいては、コミュニティソーシャルワーカーが様々な問題解決に尽力する姿が描かれているが、登場人物がどのような養成教育を受けてきたのかに関する情報がない。

対人援助職のなかでも、医師や看護師などの医療専門職や教師などの社会的認知が進んでいる職業は、その養成課程に関する説明がなくとも、どのような教育を経ることによってその職業に就くことができるのかに関する一般の理解は高いものであると推測される。それは、それらの職業はその職業像が比較的明確であり、日常生活の中で頻繁に接触する機会をもつからであると考えられる。

また、たとえそれらの職業像や養成課程において知らない者がいても、社会的認知の高い職業はその周囲に、当該情報を保持している者が存在している可能性が高い。例えば、どのような過程を経ることで医師になることができるのかわからない子どもがいたとしても、その周囲にいる親や教師などがその養成課程を教示してくれる可能性が高い。しかし、ソーシャルワーカーは医師や看護師、教師等と比較してその社会的認知度は低いものと推察される。そのため、上記のような疑問を子どもが抱いたとき、それを正確に伝えられる者が周囲に存在しない可能性もありうる。

もちろん、本作品をみて、ソーシャルワーカーの仕事に興味をもち、自ら進んで、その養成課程を調べることにより、社会福祉士養成校に入学してくるティーンエージャーもいるであろう。

しかし、ドラマ内において養成課程が明らかにされていれば、より多くの者がその養成課程を知り、強い動機づけがなくとも、その養成校に入学してくる可能性を高める。社会福祉士の職域は広く、養成校に入学後、様々な分野に関心が広がる可能性もある。例えば、地域福祉に興味があって、社会福祉士養成校に入学したけれど、勉強を進めていくうちに児童福祉の分野に関心が広がったとか、福祉と司法の関わりに関心を持ったなどの経過が考えられる。

ソーシャルワーカーの養成課程が正確に表現されることは、これまで述べてきたように、将来の福祉人材確保の点からも重要と言える。

## Ⅵ　考察

「ソーシャルワーカー」という職種を聞いて、それがどのような職務を遂行している者を指すのかイメージできる人はどの程度いるのだろうか。カウンセラーであれば、具体的な仕事内容までは把握できなくとも、ある程度の職業イメージを抱ける者は多いであろうが、それがソーシャルワーカーとなると世間一般の認知度は低調であることが推測される。

では、職業イメージを比較的抱きやすい職業はなぜ存在するのであろうか。それは、当該職業が世間の目に触れやすいからである。例えばソーシャルワーカーと同じ、対人援助職のひとつである保育士や幼稚園教諭は多くの人がその発達過程において接する機会をもつ職業である。また医師や看護師は、自身や家族が病気に罹った際に病院や診療所に赴けば接することが可能な職業である。上記のカウンセラーも、中学校や高等学校に配置が進み、「心の時代」と呼ばれる時代背景もあって、その職業像をイメージすることは容易になりつつある。

一般的に接する機会が少ない職業であっても、その職業像が比較的容易にイメージできる職業も存在する。例えば、弁護士は一般的には接する機会が少ないと考えられる職業のひとつであるが、その姿はテレビドラマ等で頻繁に取り上げられる機会を与えられている。そのため、自身が弁護士と一度も接触したことがなくとも、その職業像は比較的抱きやすいものと考えられる。

しかしソーシャルワーカーは、人々の発達段階のなかで必ずしも出会う職業ではない。一般的にソーシャルワーカーが対象とするのは、生活上の困難を抱えた人である。そのため、幸運にも大きな問題を抱えることなく生活を営んできた人は、ソーシャルワーカーと出会う可能性が少ないといえる。1987（昭和62）年にソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士が国家資格として登場して以来、この資格を取得する人々が増加している。今日においては、自身の家族や知り合いに社会福祉士がいるという人が増加していると考えられる。けれども、社会福祉士をソーシャルワーカーの国家資格と認識し、その職業像が想起できる人が、上記と同じように増加しているとは思われない。

また、弁護士のように自身が接する機会を持たなくとも、当該職業がテレビ等のメディアで頻繁に取り上げられる機会を得れば、その職業像を伝達する機能を結果的にメディアが果たしてくれるといえる。しかし、ソーシャルワーカーがメディアの中で取り上げられる機会は少ない。

それでも、近年では『社会福祉士になるには』等のタイトルで、その職業像と魅力を伝達する書籍も発売されている。また、数は少ないものの、ソーシャルワーカーを取り上げた漫画や小説、テレビ番組も存在する。

この動向は、ソーシャルワーカーの職業像を明確化することに貢献する可能性があり、基本的には歓迎されることである。

また今回研究対象としたテレビドラマにおいては、ソーシャルワーカーたちが悩みながらも懸命に問題を解決していこうとする場面が数多く描かれている。

尾崎らは、ソーシャルワーク実践のなかで「ゆらぎ」の重要性を指摘している。実践のなかで感じる悩みや不全感は否定されるものではなく、それらは逆にソーシャルワーク実践の専門性や質を高める働きをするという主張を尾崎らは行っているのである[10)]。このことは、本作品にも当てはまるものと思われる。主人公はドラマ内において様々な問題に対し、悩み苦しむ様子が描かれているが、そのことが結果的によりよい支援に結びついているのである。

しかし、メディアは事実とは異なった情報を伝達してしまう可能性も否定できない。横山は、「フィクションという前提ではあっても、実生活の中で接する機会の多い医師・看護師に比べて、一般的な認知度が低いソーシャルワーカーの場合は、現実と誇張との区別や紙数の都合によって説明の省略されている部分などが」一般には判別がつきにくいとし、その面に関し、「注意深い表現が望まれる」としている[11)]。

横山の指摘通り、本作品のようなドラマ等を制作する際には、専門家等のアドバイスなどを受ける等、より注意深い表現をしていく必要があるだろう。

今回研究対象としたテレビドラマは、大阪府豊中市と豊中市社会福祉協議会等が取材協力している。豊中市社会福祉協議会では、2004（平成16）年から地域福祉計画に基づき、豊中市より委託を受けてコミュニティソーシャルワーカーの配置事業を実施している。豊中市社会福祉協議会では、コミュニティソーシャルワーカーの現場を紹介する書籍を刊行している[12),13)]。

この書籍で紹介されている事例には、ドラマの中で扱われている社会問題も数多く含まれている。このような書籍が豊富になることは、ソーシャルワーカーの職業像明確化に大きく貢献するであろう。

社会福祉実践の総合研究誌である「ソーシャルワーク研究」においても、本作品の放送期間中に「サイレント・プア：現代的貧困を顧みる」が巻頭言として掲載された。その中で、牧里は当該ドラマについて、「現実におきている生活困難への取り組みであり、物言わない住民が想像以上に現代社会に存在していることの警鐘にはなっている」と肯定的な評価を行っている[14)]。

今後も、ソーシャルワーク実践者やその研究者は、本作品のようなテレビドラマ等に対して、専門的見地から助言、アドバイスを続けていくことが望まれる。

保正らの指摘の通り、「日本ではまず、ソーシャルワーカー自身の仕事ぶりや生き方、人物像を扱った文献が豊富になることが必要」である[15)]。

また、空閑が述べるように「ソーシャルワーカーに共有され、また後進に継承されるべき専門性や実践力という「財産」を形成するためにも、ソーシャルワーカーとその体験、援助の営みにおける様々な場面でのソーシャルワーカーの思考や行動などを言葉にすること、あるいはそれを表現する言葉を生み出し、使いこなす作業を重ねる必要」がある[16)]。

ソーシャルワーカーの仕事内容は、説明が難しく、他者に伝達することに困難を伴う側面を有する。そのことは、ソーシャルワーカーの養成教育においても課題のひとつとして考えられている。

社会福祉士養成校において、そのカリキュラムのひとつである「相談援助実習」に学生が赴くとき、当該現場にてどのようなソーシャルワーク実践が行われているかを、学生が事前にイメージできないことがある。また、ソーシャルワーカーが活躍する現場は多彩であるため、例えば、病院のソーシャルワーカーならイメージ可能でも、障害者施設におけるソーシャルワーカーのイメージがつかめない学生もいる。先行研究では、病院や児童相談所等で活躍するソーシャルワーカーの職業像を明らかにする作品があることを述べたが、今後は、高齢者分野や障害者分野等におけるソーシャルワーカー像も明らかにする必要があろう。これらの研究が進展することは、ソーシャルワーカー養成教育を受ける学生が実習や就職を行う際にも、その職業像をつかむ一助となるであろう。

ソーシャルワーカーを扱った文献や映像作品を豊富にしていくことは、その職業像明確化にとって必要不可欠である。また、潜在的福祉ニーズの掘り起こしや、将来の福祉人材確保の点からも、今後ともこの領域の研究進展が望まれる。

**文献**


1）田中秀和，立花直樹：高校福祉科と福祉職の職業像―福祉人材確保に向けた一考察―，新潟医療福祉学会誌12（２）：88－94，2012.

2）横山豊治：ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品に関する一考察―医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの事例検討―，新潟医療福祉学会誌３（２）：89－98，2003.

3）田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマにおける職業像の研究，新潟医療福祉学会誌12（２）：２－７，2012.

4）田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたノンフィクション番組に関する一考察，新潟医療福祉学会誌８（２）：30－34，2008.

5）横山豊治：フィクション作品におけるソーシャルワーカー像の検討―MSWを主人公に描いた４作品を通して―，医療ソーシャルワーク研究１（１）：24－36，2011.

6）横山豊治：フィクション作品に描かれるMSWの働き，病院71（３）：225－228，2012.

7）稲葉陽二：ソーシャルキャピタル入門―孤立から絆へ．中公新書．東京．2011.

8）ロバート，D. パットナム：孤独なボウリング―米国コミュニティの崩壊と再生（柴内康文訳）．柏書房．東京．2006.

9）横山豊治：社会福祉士資格がソーシャルワークにもたらしたもの―社会福祉士の実践領域を概観して―，ソーシャルワーク研究37（２）：103－110，2011.

10）尾崎新編：「ゆらぐ」ことのできる力―ゆらぎと社会福祉実践．誠信書房．東京．1999.

11）横山豊治：前掲５）.

12）豊中市社会福祉協議会：セーフティネット―コミュニティソーシャルワーカーの現場．筒井書房．東京．2012.

13）豊中市社会福祉協議会：セーフティネット―コミュニティソーシャルワーカーの現場２．筒井書房．東京．2013.

14）牧里毎治:サイレント・プア:現代的貧困を顧みる，ソーシャルワーク研究40（１）：１，2014.

15）保正友子，竹沢昌子，鈴木眞理子ら：成長するソーシャルワーカー―11人のキャリアと人生．筒井書房．東京．182．2003.

16）空閑浩人：ソーシャルワーカーを支える「知」の集積，空閑浩人編　ソーシャルワーカー論―「かかわり続ける専門職」のアイデンティティ．ミネルヴァ書房．京都．242．2012.